L'ARTICLE "CONTRACTÉ" に関する考察

——フランス語の "esprit" と "clarté" との矛盾——

赤羽文子

フランス語は世界で最も美しい言葉の一つであるということがしばしばいわれる。また他方、フランス語は非常に明晰であるともいわれる。確にフランス語は美しく、そして論理的な言葉である。このフランス語の「美しさ」、「論理性」は単に自然にそうなったというようなものでなくて、言葉に対するフランス人の異常なまでの愛着、関心、そして長い年月をかけての陶冶育成の努力から生れて来たものである。だが「美しさ」への愛着、「論理性」の追求、この両者が強ければ強い程、それが矛盾として表われることがある。これから本稿が扱おうとする L'article contracté 〃収縮冠詞〃に、両者の矛盾が典型的に表われていると考えられる。フランス語の美しさとは本来「語り」の美しさであり、その言葉が耳に入ってくる時の流動的な「美しさ」を求めて発音上のテクニックとしての Liaison とか Elision, あるいは前置詞 à または de と冠詞 le (les) とを結合、収縮 (contraction) させた L'article contracté が生れて来たのであった。以下、この収縮冠詞を実際の文例に当ってその使い方を考察することによって、フランス語の「美しさ」(esprit) と「論理性」(clarté) の矛盾を具体的に描き出してみたい。

古いフランス語では前置詞 à または de と冠詞 le (les) とは奇妙な結合を行って、単数形では al, del, deu, don, 複数形では、als, as, aus, dels となったが、その後これらが変化整理されて、いわゆる現在の収縮冠詞 au, aux, du, des の形ができ上った。そして現在ではこれらは一定の規則をもって使われるようになっているが、しかしなお実際の使用に当って躊躇したり、収縮を止めて前置詞と冠詞を従来の形のままで用いたり、混同したりしている例がしばしばみられる。

収縮冠詞が一般の普通名詞の前に使われる時は、規則どおりに用いられて問題がないが、個有名詞（人名、地名）の場合はどうであろうか。フランス人の人名には Le Nôtre とか、Le Bidois とか Le Corbusier のように冠詞をもつ姓が有るが、これが前置詞 à または de のあとにきた時には収縮は行われないのが原則である。《le jardin de Le Nôtre》であって《le jardin du Nôtre》ではない。これはあくまでも個人主義を主張するフランス人らしい論理

とみられるが、ただし、個人の姓が普遍的な意味をもって使われた時にはその冠詞 le は前置詞と結合して収縮冠詞となる。有名な建築家ル・コルヴュジエ (Le Corbusier) はその機能主義をもって知られるが、一方彼の教会建築にみられるデザインの漸新さ、奇抜さもまた彼の名を高くしている。それで人々は現実離れのしている事柄や事物に対して冷やかしの意味で《Les fantaisies du Corbusier》という。ここでは個人の姓が、その人物の傑出した特色をかりて一般的な事柄の特色を形容する普遍性を持つものとして扱われたので、普通名詞の冠詞の場合と同じように収縮させられたわけである。また非常にくだけた、むしろ卑俗な日常会話では時には人名の収縮が行われる例がある。鋭い諷刺で知られるユモリスト、トリスタン・ベルナール (Tristan Bernard) は Le Fardeau de la liberté のなかで二人の巡査に彼等のボス Le Fèvre 氏について次のようにしゃべらせている。《ça, c'est encore un coup au Fèvre! — Tu vois du Fèvre partout!》『これもまたル・フェーブル奴のおかげだぜ!』『お前はなんでもル・フェーブルのせいにする!』un coup à Le Fèvre を収縮させて au Fèvre にしてしまった仲間に対し、相手はややましな du Fèvre で答えているが、いずれにしても人名を収縮させることによって卑俗で無教養な会話となっている。(因みに前置詞 à はここでは原因を表わすものと考えられる。) このように人名の収縮冠詞はあくまで例外であることはいうまでもない。

では地名の場合はどうか。例えば港町の Le Havre, 飛行場のある Le Bourget, 地形の奇妙さで知られる Le Puy, その他 Le Mans, Les Andlys, Le Vigan, Le Caire など、le または les で始まる地名は前置詞 à または de と結合して収縮冠詞となるのが規則であり義務である。《le port du Havre》《des habitans des Andlys》であって、《le port de Le Havre》《des habitans de Les Andlys》ではない。

しかし現状では市庁舎の役人や駅で働く人達の間では此の地名の収縮冠詞を拒否して、公然と文書や掲示板、アナウンスなどで前置詞と冠詞を分離して用いる傾向がある。《Le rapide de Le Havre》、《au chef de gare de Le Puy》《direction de Les Andlys》など……。アンバリッド空港のアナウンサーは《Les voyageurs à destination de Le Caire》と繰り返す。市庁舎の書記は《Commune de Le Chesnay》《Mairie de Le Vigan》と書く。さらに新聞の雑報記者はその通知欄に《M. X. ……né à Les Beaux-de provence, a été arrêté……》と書く。このように役人達が地名の収縮冠詞を拒否するのは、『疑いもなく、厳密さと正確さにすりかえられた官僚的小心さによってであり、目前の文字 (lettre) を尊重するあまり、生きている言葉の精神 (esprit) を殺している』(R・Le Bidois, Le Monde, 21 av 66) といえよう。

またアルベール・ドーザ (Albert Dauzat) はこのような現象は役人や駅員の仕事の上の怠慢が生んだ結果であるとみている。すなわち、往年の役人達は各自の仕事を愛し、義務を完全に果すために非常な努力を払っていたので、書類作成にあたってもその都度内容に応じた手書きの綿密なものを作った。現在の彼等は、どこの地区でも同一形式の前もって準備され、印刷された書類に日時と地名を

記入するだけになった。《Le maire de……, 》、《Le chef de gare de…… 》、この点線の部分に地名を記入するだけならば、前置詞 de と冠詞の収縮はなおざりにならざるを得ない。これこそまさに彼等の怠慢である。……さらにドーザは次のようなエピソードを挙げて、形式的で怠慢な役人を非難している。『かって法皇がヴァチカン官殿に枢機卿の訪問をうけた折、いならぶ司教達(évreque) をフランス語で紹介することになった。係の者がフランスの Le Mans 出身の司教を紹介して《l' évreque de Le Mans》というと、法皇ははげしく《Non ! du Mans ! du Mans !》と訂正したという。』外国人である法皇ですら間違ったフランス語に対してこのような怒りを示めすのに、我がフランスの役人達 (ronds-de cuir) はなんと恥知らずなことであろうか。(Guide du bon usage, P.162〜163)

次に収縮冠詞の使用に際し、しばしば問題となる文学や評論の表題について考察してみよう。

最初に作品のタイトルが le または les の冠詞を持つ一つの名詞からなっている場合はどうか。《la scéne du Cide》《le succés du Misanthrope》となるのが当然である。

しかし、このような場合においても収縮冠詞を用いない風潮がある。例えば《Le Centenaire de Les Misérables》の場合、ビクトール・ユーゴー (Victore Hugo) の小説の表題は Les Misérables であって、Misérables ではないという口実が主張される。さらに同じような論拠を引用して一つの名詞とその補語をもつ表題に関しても収縮冠詞を用いるのを拒否する例がある。しかしたとえこれ等が作品の独自の表題であるにしても、収縮冠詞 du または des は本来の役割り上、冠詩 (le, les) の存在を意味しているので、次のように収縮冠詞を用いてみても、その正確な表題を読みちがえることはないであろう。《Voici la deuxiéme version du Soulier du satin》。

しかし現状では文章を書くことを専門とする作家達においても収縮冠詞の使用を躊躇する風潮がみられる。たとえばアルベレス (R. M. Albéres) は《Les nouvelles Psychologique du Pays sans chemin》と規則どおり書いておりながら、すぐその後で《Comme il y a deux ans, celles de Le Mauvais charme》(Combat, 9 av. '59) と書いている。また本の広告や、新刊書の帯カバーなどで作者の新刊書を紹介する場合、その本の前に出版された同じ作者の本の表題と、それに続いて書き下された本という意味で新刊書の表題を suivi de で結ぶ形式がしばしば用いられる。《Piere Gascau, Les Bêtes suivi de Le Temps des morts》このように suivi de に続く時は殆んど収縮冠詞を用いていない。なかには suivi de という文字だけ小さい書体で目立たぬように印刷するものもあるが、それでも言葉の esprit を損ねた、形式ばった使い方という感じはまぬがれない。

次に一つの表題の中に同格の二つの名詞を含んで de または à をともなって云われる時には、ことはますます複雑になってくる。スタンダール (Standhal) の有名な小説、Le Rouge et le Noir について各種の形をみてみよう。この表題における収縮冠詞の用い方は、しばしば文法書に取り上げられるが (M. Grevisse, Le Bon

usage — grammaire française —, 田辺貞之助、『現代フランス文法』) 実例にあたりながら考察してみよう。

《Relisez le début du père Goriot, la fin de Le Rouge et le Noir》(Duhamel, Défense des lettres, P265) 《A propos de Le Rouge et le Noir, elle m'a fait une remarque trés curieuse》(J. Romains, Douceur de la vie, P 110) このような扱い方は表題のオリジナリテを尊重しようとする慎重さから収縮冠詞を拒否したものであろう。

しかしより多くみられる形は収縮冠詞 du または au を最初の名詞 (Rouge) の前でのみ使い、二番目の名詞では冠詞そのものを省いている形である。《le première projet du Rouge et Noir…》(H. Marteau, "L'œuvre de Stendhal, P 388) 《C'était un peu la veine du Rouge et Noir》(P. Léautaud, Journal litter., XV II, P. 108) 《Il cite cette phrase du Rouge et Noir》(Gide, Journal. 7. déc' 42) その他多くの評論にこの形式が用いられているが、しかしこの扱い方では、本来の表題がやや変形されていて、原作者スタンダールがLe Rouge et Noir と題したかのような錯覚を与えかねない。しかも作者が Le Rouge は軍人を、Le Noir は僧侶を象徴するものとして、それを対置させることによって、一八三〇年代、ナポレオン設落後の反動期の憂鬱な世相を描こうとしたという表題の一般的な解釈からみてもこの扱い方には難点があるといわねばならない。

さらに奇妙な例として同格の名詞の後者の冠詞をも収縮させた例をあげてみよう。マダム・ド・セビネ (Mme de Sevigné) が《nons apprimes par coeur celle (la fable) du Singe et du Chat》と云っているが (M. Grevisse, op. cit. § 3)、その文意は、私達は「猿と猫」という寓話を暗記したというものであるが、これでは「猿」という寓話と「猫」という寓話が二つ有ると誤解されかねない。同じように《la morale du Corbeau et du Renard》とすると「烏」の教訓と「狐」の教訓が二つあるような誤解をまねくこともある。

以上のように同格名詞が二つ以上ある表題の場合には、前置詞と最初の表題の冠詞の間にその作品の属するジャンルを示す語 (terme générique) を置くことで以上のような難を避ける方法が使われる。《La publication du roman Le Rouge et Le Noir》《L, extrait de la fable Le Corbeau et Le Renard》 このような配慮をすれば、その表題の原形を尊重することになり、また文法的にも正しい文章を作ることができるわけであるが、しかし文章全体は改まって重々しい感じになることは避けられない。また作品によっては、それがどのジャンルに属するかをはっきり決められないものもあるので (すなわち、或る種の評論ではそれが essai なのか、étude なのか、または traite なのか決められない場合がある)、この terme génerique を用いることですべてを解決することはできない。

以上みてきたように、収縮冠詞は一般的な用法では義務として使われるが、その他の場合は、あくまでも絶対的な規則というものはなく、文章の前後の関係とか、使う人の趣味の問題で「論理性」を尊重するか、または言葉の流動的な「美しさ」を好むかによって異った扱い方が生れてくるのである。